

ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記

宮沢賢治

青空文庫

一、ペンネンネンネン・ネネムの独立

〔冒頭原稿数枚焼失〕のでした。実際、東のそらは、お「キレ」さまの出る前に、琥珀色こはくのビールで一杯いっぱいになるのでした。ところが、そのまま夏になりましたが、ばけものたちはみんな騒さわぎはじめました。

そのわけ「十七字不明」ばけもの麦も一向みのらず、大「六字不明」が咲いただけで一つぶも実になりませんでした。秋になっても全くその通「七字不明」栗くりの木さえ、ただ青いがばかり、「八字不明」飢饉ききんになってしまいました。

その年は暮れましたが、次の春になりますと飢饉はもうとてもひどくなつてしまいました。

ネネムのお父さん、森の中の青ばけものは、ある日頭をかかえていつまでもいつまでも考えていましたが、急に起きあがつて、「おれは森へ行つて何かさがして来るぞ。」と云いながら、よろ家を出て行きましたが、それなりもういつまで待つても帰つて来ませんでした。たしかにばけもの世界の天国に、行つてしまつたのでした。

ネネムのお母さんは、毎日目を光らせて、ため息ばかり吐いていましたが、ある日ネネムとマミミとに、

「わたしは野原に行つて何かさがして来るからね。」と云つて、

よろよろ家を出て行きましたが、やはりそれきりいつまで待っても帰って参りませんでした。たしかにお母さんもその天国に呼ばれて行ってしまったのでした。

ネネムは小さなマミミとただ二人、寒さと飢えとにガタガタふるえて居りました。

するとある日戸口から、

「いや、今日は。私はこの地方の飢饉を救^{たす}げに来たものですがね、さあ何でも喰^たべなさい。」と云いながら、一人の目の鋭^すいせいの高^かい男が、大きな籠^{かご}の中に、ワッフルや葡萄^{ぶどう}パンや、そのほかうまいものを沢^{たく}山^{さん}入れて入って来たのでした。

二人はまるで籠を引たくるようにして、ムシヤムシヤムシヤ

ムシヤ、沢山喰べてから、やつと、

「おじさんありがとう。ほんとうにありがとうよ。」なんて云つたのでした。

男は大へん目を光らせて、二人のたべる処ところをじつと見て居りましたがその時やつと口を開きました。

「お前たちはいい子供だね。しかしいい子供だというだけでは何にもならん。わしと一いっしょ緒いっしょにおいで。いいところへ連れてつてやろう。もっと尤も男の子は強いし、それにどうも膝ひざやかかとの骨が固まつてしまつてゐるようだから仕方ないが、おい、女の子。おじさんとこへ来ないか。一日いっぱい葡萄パンを喰べさしてやるよ。」

ネネムもマミミも何とも返事をしませんでした。男はふいつと

マミミをお菓子かしの籠の中へ入れて、

「おお、ホイホイ、おお、ホイホイ。」と云いながら俄にわかにあわてだして風のように家を出て行きました。

何のことだかわけがわからずきよろきよろしていたマミミ「一字不明」、戸口を出てからはじめてわっと泣き出しネネムは、

「どろぼう、どろぼう。」と泣きながら叫さけんで追いかけてましたがもう男は森を抜ぬけてずうっと向うの黄色な野原を走って行くのがちらっと見えるだけでした。マミミの声が小さな白い三角の光になつてネネムの胸にしみ込こむばかりでした。

ネネムは泣いてどなつて森の中をうろうろはせ歩きましましたがとうとう疲つかれてばたつと倒たおれてしまいました。

それから何日経^たったかわかりません。

ネネムはふつと目をあきました。見るとすぐ頭の上のばけもの栗の木がふつふつと湯気を吐^はいていました。

その幹に鉄のはしごが両方から二つかかって二人の男が登って何かしきりにつなをたぐるような網^{あみ}を投げるようなかたちをやつて居りました。

ネネムは起きあがって見ますとお「キレ」さまはすっかりふだんの様になっておまけにテカテカして何でも今朝あたり顔をきれいに剃^そったらしいのです。

それにかれ草がほかほかしてばけものわらびなどもふらふらと生え出しています。ネネムは飛んで行ってそれをむしやむしやた

べました。するとネネムの頭の上でいやに平べったい声がありました。

「おい。子供。やっと目がさめたな。まだお前は飢饉のつもりかい。もうじき夏になるよ。すこしおれに手伝わないか。」

見るとそれは実に立派なしんしげもの紳士でした。貝かい殻がらでこしらえた外がい套とうを着て水煙草みずたばこを片手に持って立っているのです。

「おじさん。もう飢饉は過ぎたの。手伝って何を手伝うの。」

「昆布こんぶ取りさ。」

「ここで昆布がとれるの。」

「取れるとも。見ろ。折角やつてるじゃないか。」

なるほどさっきの二人は一生けん命網をなげたりそれを繰くった

りしているようでしたが網も糸も一向見えませんでした。

「あれでも昆布がとれるの。」

「あれでも昆布がとれるのかつて。いやな子供だな。おい、縁起えんぎでもないぞ。取れもしないところにどうして工場なんか建てるんだ。取れるともさ。現におれははじめ沢山のものがそれでくらしを立てているんじゃないか。」

ネネムはかすれた声でやつと

「そうですか。おじさん。」と云いました。

「それにこの森はすっかりおれの森なんだからさつきのように勝手にわらびなんぞ取るとは疾とうに差し止めてあるんだぞ。」

ネネムは大変いやな気がしました。紳士は又云いました。

「お前もおれの仕事に手伝え。一日一ドルずつ手間をやるぜ。そうでもしなかつたらお前は飯を食えまいぜ。」

ネネムは泣き出しそうになりましたがやつとこらえて云いました。

「おじさん。そんなら僕ぼく手伝うよ。けれどもどうして昆布を取るの。」

「ふん。そいつは勿もちろん論教ごうえてやる。いいか、そら。」紳士はポケットから小さくたた畳たたまんだ洋傘こうもりがさの骨このようなものを出しました。「いいか。こいつを延ばすと子供の使うはしごになるんだ。いいか。そら。」

紳士はだんだんそれを引き延ばしました。間もなく長さメートル十米メートルば

かりの細い細い絹糸でこさえたようなはしごが出来あがりました。「いいかい。こいつをね。あの栗の木に掛けるんだよ。ああ云うぐあい工合にね。」紳士はさっきの二人の男を指さしました。二人は相かわらず見えない網や糸をまつさおな空に投げたり引いたりしています。

紳士ははしごを栗の樹きにかけました。

「いいかい。今度はおまえがこいつをのぼって行くんだよ。そら、登ってごらん。」

ネネムは仕方なくはしごとりついて登って行きましたがはしごの段々がまるで針金のように細くて手や、足に喰くい込んでちぎれてしまいそうでした。

「もつと登るんだよ。もつと。そら、もつと。」下では紳士が叫んでいます。ネネムはすっかり頂上まで登りました。栗の木の頂上というものはどうも実に寒いのでした。それに気がついて見ると自分の手からまるで蜘蛛くもの糸でこしらえたようなあやしい網がぐらぐらゆれながらずうつと青空の方へひろがっているのです。そのぐらぐらはだんだん烈はげしくなつてネネムは危なく下に落ちそうにさえなりました。

「そら、網があつたらう。そいつを空へ投げるんだよ。手がぐらぐら云うだろう。そいつはね、風の中のふかやさめがつきあたつてるんだ。おや、お前はふるえてるね。意気地なしだなあ。投げるんだよ、投げるんだよ。そら、投げるんだよ。」

ネネムは何とも云えず厭いやな心持がしました。けれども仕方なく力いっばい一杯いっばいにそれをたぐり寄せてそれからあらんかぎり上の方に投げつけました。すると目がぐるぐるつとして、ご機嫌きげんのいいおキレさままでがまるで黒い土の球たまのように見えそれからシユウとはしごのてっぺんから下へ落ちました。もう死んだとネネムは思いました。その次にもう耳が抜けたとネネムは思いました。というわけはネネムはきちんと地面の上に立っていて紳士がネネムの耳をつかんでぶりぶり云いながら立っていました。

「お前もいくじのないやつだ。何というふにやふにやだ。俺おれが今お前の耳をつかんで止めてやらなかつたらお前は今ごろは頭がパチンとはじけていたろう。おれはお前の大恩人ということになつ

ている。これから失礼をしてはならん。ところでさあ、登れ。登るんだよ。夕方になったらたべものも送ってやろう。夜になったら綿のはいったチョッキもやろう。さあ、登れ。」

「夕方になったら下へ降りて来るんでしよう。」

「いいや。そんなことがあるもんか。とにかく昆布がとれなくちやだめだ。どれちよつと一寸網を見せろ。」

紳士はネネムの手にくつついた網をたぐり寄せて中をあらためました。網のずうつとはじの方に一寸四方ばかりの茶色なヌラヌラしたものがついていました。紳士はそれを取って

「ふん、たったこれだけか。」と云いながらそれでも少し笑ったようでした。そしてネネムは又はしごを上って行きました。

やっと頂上へ着いて又力一杯空に網を投げました。それからわくわくする足をふみしめふみしめ網を引き寄せて見ましたが中にはなんにもはいっていませんでした。

「それ、すっかり投げろ。なまけるな。」下では紳士が叫びます。ネネムはそこで又投げました。やっぱりなんにもありません。又投げました。やっぱり昆布はいりません。

つかれてヘトヘトになったネネムはもう何でも構わないから下りて行こうとしました。すると愕おどろいたことにははしごがありませんでした。

そしてもう夕方になったと見えてばけものぞらは緑色になり変なばけものパンが下の方からふらふらのぼって来てネネムの前に

とまりました。紳士はどこへ行つたか影もかたちもありません。

向うの木の上の二人もしょんぼりと頭を垂れてパンを食べながら考えているようでした。その木にも鉄のはしごがもう見えませんでした。

ネネムも仕方なくばけものパンを噛じりはじめました。

その時紳士が来て、

「さあ、たべてしまつたらみんな早く網を投げろ。昆布を一斤とらないうちは綿のはいつたチョツキをやらんぞ。」とどなりました。

ネネムは叫びました。

「おじさん。僕もうだめだよ。おろしてお呉れ。」

紳士が下でどなりました。

「何だと。パンだけ食ってしまったてあとはおろしてお呉れだど。

あんまり勝手なことを云うな。」

「だってもううごけないんだもの。」

「そうか。それじゃ動けるまでやすむさ。」と紳士が云いました。

ネネムは栗の木のてっぺんに腰こしをかけてつくづくとやすみました。

その時栗の木が湯気をホツホツと吹ふき出しましたのでネネムは少し暖まって楽になったように思いました。そこで又元気を出して網を空に投げました。空では丁度星が青く光りはじめたところでした。

ところが今度の網がどうも実に重いのです。ネネムはよろこん

でたぐり寄せて見ますとたしかに大きな大きな昆布が一枚ひらりとはいって居りました。

ネネムはよろこんで

「おじさん。さあ投げるよ。とれたよ。」

と云いながらそれを下へ落しました。

「うまい、うまい。よし。さあ綿のチョツキをやるぜ。」

チョツキがふらふらのぼって来ました。ネネムは急いでそれを着て云いました。

「おじさん。一ドル呉れるの。」

紳士が下の浅黄色のもやの中で云いました。

「うん。一ドルやる。しかしパンが一日一ドルだからな。一日十

斤以上こんぶを取つたらあとは一斤十セントで買つてやろう。そのよけいの分がおまえのもうけさ。ためて置いていつでもはら払つてやるよ。その代り十斤に足りなかつたら足りない分がお前の損さ。その分かしにして置くよ。」

ネネムは実にながかりしました。向うの木の二人の男はもういくら星あかりにすかして見ても居ないようでした。きつとあんまり仕事がつらくてしょうめつ消滅してしまつたのでしよう。さてネネムは決心しました。それからよるもひるも栗の木の湯気とばけものパンと見えない網と紳士と昆布と、これだけを相手にして実に十年というものこの仕事をつづけました。これらのあいて対手の中でもパンと昆布とがまず大将でした。はじめの四年は毎日毎日借りばか

り次の五年でそれを払いおしまい
の三ヶ月でお金がたまりました。
そこで下に降りてたまった三百
ドルをふところにしてばけもの
世界のまちの方へ歩き出しまし
た。

二、ペンネンネンネンネン・ネネムの立身

ペンネンネンネンネン・ネネムは十年のあいだ木の上に直立し
続けた^{ため}にしきりに痛む^{ひざ}膝を撫^なでながら、森を出て参りました。
森の出口に小さな雑貨商がありましたので、ネネムは店にはいつ
て、まつ黒な上着とズボンを一つ買いました。それから急いでそ
れを着ながら考えました。

「何か学問をして書記になりたいもんだな。もう投げるようなたぐるようなことは考えただけでも命が縮まる。よしきつと書記になるぞ。」

ペンネンネンネンネン・ネネムはお銭あしを払って店を出る時ちらつと向うの姿見にうつった自分の姿を見ました。

着物が夜のようにまつ黒、縮れた赤毛が頭かたから肩かたにふさふさ垂れまつ青な眼めはかがやきそれが自分だかと疑った位立派でした。

ネネムは嬉うれしくて口笛くちぶえを吹いてただ一息に三十ノツトばかり走りました。

「ハンムンムンムン・ムムネの市まで、もうどれ位ありましようか。」とペンネンネンネンネン・ネネムが、向うからふらふ

らやって来た黄色な影法師のばけ物にたずねました。

「そうだね。一寸ここまでおいで。」その黄色な幽霊^{ゆうれい}は、ネネムの四角な袖^{そで}のはじをつまんで、一本のばけものりんごの木の下まで連れて行って、自分の片足をりんごの木の根にそろえて置いて云いました。

「あなたも片足をここまで出しなさい。」

ネネムは急いでその通りしますとその黄色な幽霊は、屈^{かが}んで片っ方の目をつぶって、足さきがりんごの木の根とよくそろっているか検査したあとで云いました。

「いいか。ハンムンムンムンムン・ムムネ市の入口までは、丁度この足さきから六ノツト六チエーンあるよ。それでは途^{とちゆう}中^{ちゆう}気を

つけておいで。」そしてくるつとまわって向うへ行つてしまひました。

ネネムはそのうしろから、ていねいにお辞儀をして、

「ああありがとうございます。六ノツト六チエーンならば、私が一時間一ノツト一チエーンずつあるきますと六時間で参れます。一時間三ノツト三チエーンずつあるきますと二時間で参れます。すつかり見当がつきまして、こんなうれしいことはありません。」と云いながら、もう一つ頭を下げました。赤毛はじやらんと下に垂さがりましたけれども、実は黄色の幽霊はもうずうつと向うのばけもの世界のかげろうの立つ畑の中にでもはいつたらしく、影もかたちもありませんでした。

そこでネネムは又あるき出しました。すると又向うから無暗むやみに
ぎらぎら光る鼠色ねずみの男が、赤いゴム靴くつをはいてやつて参りました。
そしてネネムをじろじろ見ていましたが、突とつ然ぜんそばに走つて来
て、ネネムの右の手首をしつかりつかんで云いました。

「おい。お前は森の中の昆布採こんぶりがいやになつてこつちへ出て来
た様子だが、一体これから何が目的だ。」

ネネムはこれはきつと探偵たんでいにちがいないと思ひましたので、
堅かたくなつて答えました。

「はい。私は書記が目的であります。」

するとその男は左手で短いひげをひねつて一寸考えてから云い
ました。

「ははあ、書記が目的か。して見ると何だな。お前は森の中であんまりばけものパンばかり喰ったな。」

ネネムはすっかり凶星ずぼしをさされて、面くらって左手で頭を搔かきました。

「はい実は少少たべすぎたかと存じます。」

「そうだろう。きつとそうにちがいない。よろしい。お前の身分や考えはよく諒解りようかいした。行きなさい。わしはムムネ市の刑事だ。」

ネネムはそこでやっと安心してていねいにおじぎをして又町の方へ行きました。

丁度一時間と六分かかって、三ノツト三チエーンを歩いたとき、

ネネムは一人の百姓のおかみさんばけものと会いました。その人は遠くからいかに不思議そうな顔をして来ましたが、とうとう泣き出してかけ寄りました。

「まあ、クエクや。よく帰っておいでだね。まあ、お前はわたしを忘れてしまったのかい。ああなさけない。」

ネネムは少し面くらいましたが、ははあ、これはきつと人ちがいだと気がつきましたので急いで云いました。

「いいえ、おかみさん。私はクエクという人ではありません。私はペンネンネンネンネン・ネネムというのです。」

するとその橙^{だいだい}色の女のばけものはやっと気がついたと見えて俄^{にわ}かに泣き顔をやめて云いました。

「これはどうもとんだ失礼をいたしました。あなたのおなりが
あんまりせがれそつくりなもんですから。」

「いいえ。どう致いたしまして。私は今度はじめてムムネの市に出る
処ところです。」

「まあ、そうでしたか。うちのせがれも丁度あなたと同じ年ころ
でした。まあ、お髪くしのちぢれぐあい工合ぐあいから、お耳みみのキラキラする工合、
何から何までそつくりです。それにまあ、なめくじなめくじばけものよ
うな柔やわらかなおあしに、硬かたいはがねのわらじをはいて、なにが御
志願しげんでいらしやるのやら。おお、うちのせがれもこんなわらじで
どこを今ごろ、ポオ、ポオ、ポオ、ポオ、ポオ。」とそのおかみさんば
けものは泣き出しました。ネネムは困って、

「ね、おかみさん。あなたのむすこさんは、もうきつとどこかの書記になつてゐるんでしよう。きつとじきお迎むかいをよこすにちがいありません。そんなにお泣きなさらなくてもいいでしょう。私は急ぎますからこれで失礼いたします。」と云いながらクラリオネツトのようすすり泣きの声をあとに、急いでそこを立ち去りました。

さてそれから十五分でネネムはムムネの市までもう三チエーンかみの所まで来ました。ネネムはそこで髪かみをすつかり直して、それから路みちばたの水銀の流れで顔を洗い、市にはいつて行く支度したくをしました。

それからなるべく心を落ちつけてだんだん市に近づきますと、

さすがはばけもの世界の首府のけはいは、早くもネネムに感じました。

ノンノンノンノンノンというなりは地の〔以下原稿数枚分焼失〕

「今授業中だよ。やかましいやつだ。用があるならはいって来い。」とどなりましたので、学校の建物はぐらぐらしました。

ネネムはそこで思い切って、なるべく足音を立てないように二階にあがってその教室にはいりました。教室の広いことはまるで野原です。さまさまの形、とうがらしや、白や、^{うす}鋏や、^{はさみ}赤や白や、実にさまさまの学生のばけものがぎっしりです。向うには大きな

崖がけのくらいある黒板がつるしてあって、せの高さ百尺あまりのさつきの先生のばけものが、講義をやつて居りました。

「それでその、もしも塩素が赤い色のものならば、これは最も明らかかな不合理である。黄色でなくてはならん。して見ると黄色という事はずいぶん大切なもんだ。黄という字はこう書くのだ。」

先生は黒板を向いて、両手や鼻や口や肱ひじやカラアや髪かみの毛やなにかで一ぺんに三百ばかり黄という字を書きました。生徒はみんな大急ぎで筆記帳に黄という字を一いっばい杯はひ書きましたがとても先生のようにうまくは出来ません。

ネネムはそつと一番うしろの席すわに座つて、隣となりの赤と白のまだらのばけもの学生に低くたずねました。

「ね、この先生は何て云うんですか。」

「お前知らなかったのかい。フウファイーボー博士さ。化学の。」

とその赤いばけものは馬鹿ばかにしたように目を光らせて答えました。

「あつ、そうでしたか。この先生ですか。名高い人なんですネ。」

とネネムはそつとつぶやきながら自分もふところから鉛筆えんぴつと手

帳を出して筆記をはじめました。

その時教室にパツと電燈でんとうがつかしました。もう夕方だったので

す。博士が向うで叫んでいます。

「しからば何が故ゆえに夕方緑色が判然とするか。けだしこれはプウ

ルウキインイイの現象によるのである。プウルウキインイイとは

こう書く。」

博士はみみずのような横文字を一ぺんに三百ばかり書きました。ネネムも一生けん命書きました。それから博士は俄かに手を大きくひろげて

「げにも、かの天にありて濛々もうもうたる星雲、地にありてはあいまいたるばけ物律、これはこれ宇宙を支配す。」と云いながらテールの上に飛びあがって腕うでを組み堅く口を結んできつとあたりを見まわしました。

学生どもはみんな興奮して

「ブラボオ。フウファイボー先生。ブラボオ。」と叫さけんでそれからバタバタ、ノートを閉じました。ネネムもすっかり釣り込まれて、

「ブラボオ。」と叫んで堅く堅く決心したように口を結びました。この時先生はやつとほんのすこうし笑って一段声を低くして云いました。

「みなさん。これからすぐ卒業試験にかかります。一人ずつ私の前をお通りなさい。」と云いました。

学生どもは、そこで一人ずつ順々に、先生の前を通りながらノートを開いて見せました。

先生はそれを一寸見てそれから一言か二言質問をして、それから白墨はくぼくでせなかに「及」とか「落」とか「同情及」とか「退校」とか書くのでした。

書かれる間学生はいかにもくすぐったそうに首をちぢめている

のでした。書かれた学生は、いかにも気がかりらしく、そつと肩をすぼめて廊下^{ろうか}まで出て、友達に読んで貰^{もら}つて、よろこんだり泣いたりするのでした。ぐんぐんぐんぐん、試験がすんで、いよいよネネム一人になりました。ネネムがノートを出した時、フウフイーボー博士は大きなあくびをやりましたので、ノートはスポリと先生に吸い込まれてしまいました。先生はそれを別段気にかけるでもないらしく、コクツと呑^のんでしまつて云いました。

「よろしい。ノートは大へんによく出来ている。そんなら問題を答えなさい。煙^{えんとつ}突から出るけむりには何種類あるか。」

「四種類あります。もしその種類を申しますならば、黒、白、青、無色です。」

「うん。無色の煙けむりに気がついた所は、実にどうも偉えらい。そんなら形はどうであるか。」

「風のない時はたての棒、風の強い時は横の棒、その他はみみずなどの形。あまり煙の少ない時はコルクぬ抜きのようにもなります。」

「よろしい。お前は今日の試験では一等だ。何か望みがあるなら云いなさい。」

「書記になりたいのです。」

「そうか。よろしい。わしの名刺めいしに向うの番地を書いてやるから、そこへすぐ今夜行きなさい。」

ネネムは名刺を呉くれるかと思つて待つていますと、博士はいき

なり白墨をとり直してネネムの胸に、「セム二十二号。」と書き
ました。

ネネムはよろこんで町寧^{ていねい}におじぎをして先生の処^{ところ}から一足退
きますと先生が低く、

「もう藁^{わら}のオムレツが出来あがった頃^{ころ}だな。」と呟^{つぶ}やいてテーブ
ルの上にあつた革^{かわ}のカバンに白墨のかけらや講義の原稿^{げんこう}やらを、
みんな一^{いっしょ}緒に投げ込んで、小脇^{こわき}にかかえ、さつき顔を出した窓
からホイツと向うの向うの黒い家をめがけて飛び出しました。そ
してネネムはまちをこめた黄色の夕暮^{ゆうぐれ}の中の物干台にフウフイ
ーボー博士が無事に到^{とうちやく}着して家の中に入って行くのをたしか
に見ました。

そこでネネムは教室を出てはしご段を降りますと、そこには学生が実に沢山泣いていました。全く三千六百五十三回、すなわらうらう則ち閏年も入れて十年という間、日曜も夏休みもなしに落第ばかりしていたは、これが泣かないでいられましょうか。けれどもネネムは全くそれとは違ちがいます。

元氣よく大学校の門を出て、自分の胸の番地を指さして通りかかったくらげのようなばけものに、どう行ったらいいかをたずねました。

するとそのばけものは、ひどく町寧におじぎをして、

「ええ。それは世界裁判長のお邸やしきでございます。ここから二チエーンほどおいでになりますと、大きな粘土ねんどでかためた家がござい

ます。すぐおわかりでございましょう。どうか私もよろしくお引き立てをねがいます。」と云つて又^{また}町寧におじぎをしました。

ネネムはそこで一時間一ノツト一チェーンの速さで、そちらへ進んで参りました。たちまち道の右側に、その粘土作りの大きな家がしやんと立つて、世界裁判長官^{かんでい}邸と看板がかかつて居りました。

「ご免なさい。ご免なさい。」とネネムは赤い髪を掻^かきながら云いました。

すると家の中からペタペタペタ沢山の沢山のばけものどもが出て参りました。

みんなまつ黒な長い服を着て、^{うやうや}恭々しく礼をいたしました。

「私は大学のフウファイバー先生のご紹介しょうかいで参りましたが世界裁判長に一寸お目にかかれましょうか。」

するとみんなは口をそろえて云いました。

「それはあなたでございます。あなたがその裁判長でございませう。」

「なるほど、そうですか。するとあなた方は何ですか。」

「私どもはあなたの部下です。判事や検事やなんかです。」

「そうですか。それでは私はここの主人ですね。」

「さようでございます。」

こんなような訳でペンネンネンネンネン・ネネムは一ぺんに世界裁判長になって、みんなに囲まれて裁判長室の海綿でこしらえ

た椅子いすにどっかりと座りました。

すると一人の判事が恭々しく申しました。

「今晚開廷の運びになっている件が二つございますが、いかがでございましょうお疲れつかでいらつしやいましょうか。」

「いいや、よろしい。やります。しかし裁判の方針はどうですか。」

「はい。裁判の方針はこちらの世界の人民が向うの世界になるべく顔を出さぬように致したいのでございます。」

「わかりました。それではすぐやります。」

ネネムはまっ白なちぢれ毛のかつらを被かぶつて黒い長い服を着て裁判室に出て行きました。部下がもう三十人ばかり席についてい

ます。

ネネムは正面の一番高い処に座りました。向うの隅すみの小さな戸口から、ばけものの番兵に引っぱられて出て来たのはせいの高いめの鋭いするど灰色のやつで、片手にほうきを持って居りました。一人の検事が声高く書類を読み上げました。

「ザシキワラシ。二十二歳さい。アツレキ三十一年二月七日、表、日本岩手県上かみへい閉伊郡あおぎさ青あぎ笹村字瀬戸二十一番戸伊藤万太の宅、八畳座敷中に故なくして擅ほしいままに出現して万太の長男千太、八歳を氣絶せしめたる件。」

「よろしい。わかった。」とネネムの裁判長が云いました。

「姓名ねんれい年齢ねんれい、その通りに相違そういないか。」

「相違ありません。」

「その方はアツレキ三十一年二月七日、伊藤万太方の八畳座敷に故なくして擅に出現したることは、しかとその通りに相違ないか。」

「全く相違ありません。」

「出現後は何を致した。」

「ザシキをザワツザワツと掃はいて居りました。」

「何ための為に掃いたのだ。」

「風を入れる為です。」

「よろしい。その点は実に公益である。本官おいに於て大いに同情を呈ていする。しかしながらすでに妄みだりに人の居ない座敷の中中に出現し

て、^{ほうき}箒の音を発した為に、その音に^{おど}愕ろいて一寸のぞいて見た子供が氣絶をしたとなれば、これは明らかな出現罪である。依^よつて今日より七日間当ムムネ市の街路の掃除を命ずる。今後はばけも
 の世界長の許可なくして、妄りに向う側に出現することはならん
 。
 ー

「かしこまりました。ありがとうございます。」

「実に名断だね。どうも実に今度の長官は偉い。」と判事たちは互^{たがい}にささやき合いました。

ザシキワラシはおじぎをしてよろこんで引つ込みました。

次に来たのは鳶^{とび}色と白との粘土で顔をすつかり隈^{くまど}取つて、口が耳^{みみ}まで裂^さけて、胸や足ははだかで、腰^{こし}に厚い^{みの}簞のようなものを巻

いたばけものでした。一人の判事が書類を読みあげました。

「ウウウウエイ。三十五歳。アツレキ三十一年七月一日夜、表、アフリカ、コンゴオの林中の空地に於て故なくして擅ほしいままに出現、舞ぶ踏とう中の土地人を恐怖散乱せしめたる件。」

「よろしい、わかった。」とネネムは云いました。

「姓名年齢その通りに相違ないか。」

「へい。その通りです。」

「その方はアツレキ三十一年七月一日夜、アフリカ、コンゴオの林中空地に於て、故なくして擅おりに出現、折柄おりから月明によつて歌舞、歡をなせる所の一群を恐怖散乱せしめたことは、しかとその通りにちがいないか。」

「全くその通りです。」

「よろしい。何の目的で出現したのだ。既に法律上故なく擅となつてあるが、その方の意中を今一応尋ねよう。」

「へい。その実は、あまり面白かつたもんですから。へい。どうも相済みません。あまり面白かつたんで。ケロ、ケロ、ケロ、ケロ、ケロ、ケロ、ケロ、ケロ。」

「控えろ。」

「へい。全くどうも相済みません。恐れ入りました。」

「うん。お前は、最明らかな出現罪である。依つて明日より二十日間、ムツセン街道の見まわりを命ずる。今後ばけもの世界の長の許可なくして、妄りに向側に出現いたしてはならんぞ。」

「かしこまりました。ありがとうございます。」そのばけものも引っ込みました。

「実に名断だ。いい判決だね。」とみんなささやき合いました。その時向うの窓がガタリと開いて

「どうだ、いい裁判長だろう。みんな感心したかい。」と云う声がありました。それはさっきの灰色の一メートルある顔、フウフイーボー先生でした。

「ブラボオ。フウフイーボー博士。ブラボオ。」と判事も検事もみんな怒鳴りました。その時はもう博士の顔は消えて窓はガタンとしまりました。

そこでネネムは自分の室へやに帰って白いちぢれ毛のかつらを除とり

ました。それから寝ねました。

あとはあしたのことです。

三、ペンネンネンネンネン・ネネムの巡視じゆんし

ばけもの世界裁判長になったペンネンネンネンネン・ネネムは、次の朝六時に起きて、すぐ部下の検事を一人呼びました。

「今日は何時に公判の運びになっているか。」

「本日もやはり晩の七時から二件だけございます。」

「そうか。よろしい。それでは今朝は八時から世界長に挨拶あいさつに出よう。それからすぐ巡視だ。みんなその支度したくをしろ。」

「かしこまりました。」

そこでペンネンネンネン・ネネムは、燕麦オートを一把わと、豆まめじ汁るを二リットルで軽く朝飯をすまして、それから三十人の部下をつれて世界長の官邸に行きました。

ばけもの世界長は、もう大広間の正面に座って待っています。

世界長は身のたけ百九十尺もある中世代の瑪瑙めのうぼく木でした。

ペンネンネンネン・ネネムは、恭々しく進んで片膝かたひざを床につけて頭を下げました。

「ペンネンネンネン・ネネム裁判長はおまえであるか。」

「さようございます。永久に忠勤を誓ちかたてまつい奉ります。」

「うん。しっかりやって呉くれ。ゆうべの裁判のことはもう聞いた。

それに今朝はこれから巡視に出るそうだな。」

「はい。恐れ入ります。」

「よろしい。どうかしつかりやって呉れ。」

「かしこまりました。」

そこでペンネンネンネンネン・ネネムは又うやうやしく世界長に礼をして、後あともど戻りして退きました。三十人の部下はもう世界長の首尾がいいので大喜びです。

ペンネンネンネンネン・ネネムも大だい機嫌きげんでそれから町を巡視しはじめました。

ばけもの世界のハンムンムンムン・ムムネ市の盛さかんなことは、今日とて少しも変わりません。億百万のばけものどもは、通り

過ぎ通りかかり、行きあい行き過ぎ、発生し消滅し、聯合し融合し、再現し進行し、それはそれは、実にどうも見事なものです。ネネムもいまさらながら、つくづくと感服いたしました。その時向うから、トツテントツテントツテンと、チャリネルという楽器を叩いて、小さな赤い旗をたてた車が、ほんの少しずつこつちへやって来ました。見物のばけものがまるで赤山のようになりにそのまわりについて参ります。

ペンネンネンネン・ネネムは、行きあいながらふと見ますと、その赤い旗には、白くフクジロと染め抜いてあつて、その横にせいの高さ三尺ばかりの、顔がまるでじじいのように皺くちな殊に鼻が一尺ばかりもある怖い子供のようなのが、小さな半

ずぼんをはいて立ち、車を引つ張つてゐる黒い硬かたいばけものから、「フクジロ印」という商標のマッチを、五つばかり受け取つていました。ネネムは何をするのかと思つてもつと見ていますと、そのいやなものはマッチを持つてよちよち歩き出しました。

赤山のようなばけもの見物は、わいわいそれについて行きま
す。一人の若いばけものが、うしろから押されてちよつとそのい
やなものにさわりましたら、そのフクジロといういやなものはく
るりと振り向いて、いきなりピシヤリとその若ばけもの頬ほっぺた
を撲なぐりつけました。

それからいやなものは向うの荒物屋あらのものに行きました。その荒物
屋というのは、ばけもの歯みがきや、ばけもの楊子ようじや、手拭てぬぐいや

ずぼん、前掛まえかけなどまで、すべてはけもの用具一式を売っているのでした。

フクジロがよちよちはいつて行きますと、荒物屋のおかみさんは、怖こわがって逃げようとなりました。おかみさんだつて顔がまるでぼく猿のようで、立派なばけものでしたが、小さくてしわくちやなフクジロを見ては、もうすっかりおびえあがつてしまったのでした。

「おかみさん。フクジロ・マツチ買つてお呉れ。」
おかみさんはやっと気を落ちつけて云いました。

「いくらですか。ひとつ。」

「十円。」

おかみさんは泣きそうになりました。

「さあ買ってお呉れ。買わなかったら踊おどりをやるぜ。」

「買います、買います。踊の方はいりません。そら、十円。」お
かみさんは青くなってブルブルしながら銭ぜに函ばこからお金を集めて
十円出しました。

「ありがとう。へん。」と云いながらそのいやなものは店を出ま
した。

そして今度は、となりのばけもの酒屋にはいりました。見物は
わいわいついて行きます。酒屋のはげ頭のおじいさんばけものも、
やっぱりぶるぶるしながら十円出しました。

その隣となりはタン屋という店でしたが、ここでも主人が黄色な顔を
緑色にしてふるえながら、十円でマツチ一つ買いました。

「これはいかん。実にけしからん。こう云ういやなものが町の中を勝手に歩くということはおれの恥辱ちじよくだ。いいからひつくくつてしまえ。」とペンネンネンネン・ネネムは部下の検事に命令しました。一人の検事がすぐ進んで行つてタン屋の店から出て来るばかりのそのいやなものをくるくる十重とえばかりにひつくくつてしまいました。ペンネンネンネン・ネネムがみんなを押し分けて前に出て云いました。

「こら。その方は自分の顔やかたちのいやなことをいいことにして、一つ一銭のマッチを十円ずつに家ごと押しつけてあるく。悪いやつだ。監獄かんごくに連れて行くからそう思え。」

するとそのいやなものは泣き出しました。

「巡查さん。それはひどいよ。僕はいくらお金を貰ったって自分で一銭もとりはしないんだ。みんな親方がしまつてしまふんだよ。許してお呉れ。許してお呉れ。」

ネネムが云いました。

「そうか。するとお前は毎日ただ引っぱり廻されて稼がせられる丈けだな。」

「そうだよ、そうだよ。僕を太夫さんだなんて云いながら、ひどい目にばかりあわすんだよ。ご飯さえ碌に呉れないんだよ。早く親方をつかまえてお呉れ。早く、早く。」今度はそのいやなものが俄かに元氣を出しました。

そこで

「あの車のところに居るものを引つくくれ。」とネネムが云いました。丁度出て来た巡査が三人ばかり飛んで行って、車にポカんと腰掛けて居た黒い硬いばけものを、くるくるくるつと縛しばつてしまいました。ネネムはいやなものいっしょと一いっしょ緒いっしょにそつちへ行きました。

「こら。きさまはこんなかたわなあわれなものをだしにして、一銭のマツチを十円ずつに売っている。さあ監獄へ連れて行くぞ。」

親方が泣き出しそうになって口早に云いました。

「お役人さん。そいつああんまり無理ですぜ。わしあ一日一杯いっぱいあるいてますがやつと喰くうだけしか貰もらわないんです。あとはみんな親方がとつてしまふんです。」

「ふん、そうか。その親方はどこに居るんだ。」

「あすここに居ます。」

「どれだ。」

「あのまがり角でそらを向いてあくびをしている人です。」

「よし。あいつをしばれ。」まがり角の男は、しぼられてびつくりして、口をパクパクやりました。ネネムは二人を連れてそつちへ歩いて行つて云いました。

「こらきさまは悪いやつだ。何も文句を云うことはない。監獄にはいれ。」

「これはひどい。一体どうしたのです。ははあ、フクジロもタンイチもしばられたな。その事ならなあに私はただこうやつて監かん督とくに云いつかつて車を見ている丈だけでございます。私は日給三十

錢の外に一錢だつて貰やしません。」

「ふん。どうも実にいやな事件だ。よし、お前の監督はどこに居るか、云え。」

「向うの電信柱の下で立つたまま居いねむ睡りをしているあの人は、

「そうか。よろしい。向うの電信ばしらの下のやつを縛しばれ。」巡

査や検事がすぐ飛んで行こうとしました。その時ネネムは、ふと

もつと向うを見ますと、大抵たいてい五間お隔わきぐらいに、あくびをした

りうでぐみをしたり、ぼんやり立っているものがまだまだたくさ

ん続ついています。そこでネネムが云いました。

「一寸ちよつと待まちて。まだ向うにも監督が沢山居いるようだ。よろしい。

順ぐりにみんなしばつて来い。一番おしまいのやつを逃がすなよ。

さあ行け。」

十人ばかりの検事と十人ばかりの巡査がふうとけむりのように向うへ走って行きました。見る見る監督どもが、みんなペタペタしぼられて十五分もたたないうちに三十人というばけものが一列にずうつとつづいてひっぱられて来ました。

「一番おしまいのやつはこいつか。」とネネムが緑色の大へんハイカラなばけものをゆびさしました。

「そうです。」みんなは声をそろえて云います。

「よろしい。こら。その方は、あんなあわれなかたわを使つて一銭のマッチを十円に売っているとは一体どう云うわけだ。それに三十二人も人を使つて、あくまで自分の悪いことをかくそうとは

実にけしからん。さあどうだ。」

ところが緑色のハイカラなばけものは口を尖^{とが}らして、一向恐れ入りません。

「これはけしからん。私はそんなことをした覚えはない。私は百二十年前にこの方に九円だけ貸しがあるので今はもう五千何円になつている。わしはこの方のあとをつけて歩いて毎日、日^{にっ}プで三十円ずつとる商売なんだ。」と云いながら自分の前のまっ赤なハイカラなばけものを指さしました。

するとその赤色のハイカラが云いました。

「その通りだ。私はこの人に毎日三十円ずつ払^{はら}う。払つても払つても元金は殖^ふえるばかりだ。それはとにかく私は又この前のお方

に百四十年前に非常な貸しがあるのでそれをもとでに毎日この人について歩いて実は五十円ずつとっているのだ。マッチの罪とかなんとか一向私はしらない。」と云いながら自分の前の青い色のハイカラなばけものを指さしました。すると青いのが云いました。「その通りだ。わしは毎日五十円ずつ払う。そしてわしはこの前のお方に二百年前かなりの貸しがあるのでそれをもとでに毎日ついて歩いて百円ずつとるだけなのだ。」

指されたその前の黄色なハイカラが云いました。

「そうだ。その通りだ。そしてわしはこの前のお方に昔すてきなかしがあるので、毎日ついて歩いて三百円ずつとるのだ。」

「ふうん。大分わかって来たぞ。あとはもう貸した年と今とる金

だかだけを云え。」とネネムが申しました。

「二百五十年五百円」「三百年、千円」「三百一年、千七円」

「三百二年、千八円」「三百三年、千九円」「三百四年、千十円」。

ネネムはすばやく勘定しました。

「もうわかった。第三十番。電信柱の下の立ちねむり。おまえは千三十円とっているだろう。」

「全くさようでございます。ご明察恐れ入ります。」

その時さっきの角のところ立って、あくびをしていた監督が云いました。

「どうです。そうでしょう。私は毎日千三十円三十銭だけとって、

千三十円だけこの人に納めるのです。」

ネネムが云いました。

「そうか。すると一体誰たれがフクジロを使って歩かせているのだ。」

「私にはわかりません。私にはわかりません。」とみんなが一度に云いました。そこでネネムも一寸困こまりましたがしばらくたつてから申しました。

「よし。そんならフクジロのマツチを売っていることを知っているものは手をあげ。」

硬い黒いタンイチはじめ順ぐりに十人だけ手をあげました。

「よろしい。すると十人目の貴さまが一番悪い。監獄にはいれ。」
「いいえ。どういたしまして。私はただフクジロのマツチを売っ

ていることを遠くから見ていただけでございませぬ。それを十円に売るなんて、めっそうな、私は一切に存じませぬ。」

「どうもこれはずいぶん不愉快な事件だね。よろしい。そんならフクジロがマツチを十円で売るということを知っているものは手をあげ。」

硬い黒いタンイチからただ三人でした。

「するとお前だ。監獄にはいれ。」とネネムが云いました。

「それはさつきも申しあげました。私はただ命令で見ていただけです。」

「するとお前は十円に売ることには知っている、けれどもただ云いつかっているだけだというのだな、それから次のお前は云いつけ

てはいる。けれども十円に売れなんて云ったおぼえもなし又十円に売っているとも思わない、ただまあ、フクジロがよちよち家を出たりはいつたりして、それでよくこんなにもうかるもんだと思つていたと、こうだろう。」

「全くご名察の通り。」と二人が一緒に云いました。

「よろしい。もうわかった。お前がたに云い渡す^{わた}。これは順ぐりに悪いことがたまって来ているのだ。百年も二百年もの前に貸した金の利息を、そんなハイカラななりをして、毎日ついてあるいてとるということは、けしからん。殊^{こと}にそれが三十人も続いているというのには実にいけないことだ。おまえたちはあくびをしたりいねむりをしたりしながら毎日を暮^{くら}して食事の時間だけすぐ近く

の料理屋にはいる、それから急いで出て来て前の者がまだあまり遠くへ行っていないのを見てやっと安心するなんという実にどうも不届きだ。それからおれがもうけるんじゃないと云うので、悪いことをぐんぐんやるのもあまりよくない。だからみんな悪い。みんなを罪にしなければならぬ。けれどもそれではあんまりかあいそうだから、どうだ、みんな一ぺんに今の仕事をやめてしまえ。そこでフクジロはおれがどこかの玩具おもちゃの工場の小さな室へやで、ただ一人仕事をして、時々お菓子かしでもたべられるようにしてやる。あとのものはみんな頑がんじょう丈さ。そうだから自分で勝手に仕事をさがせ。もしどうしても自分でさがせなかつたらおれの所に相談に来い。」

「かしこまりました。ありがとうございます。」みんなはフクジ口をのこして赤山のような人をわけてちりぢりに逃げてしましました。そこでネネムは一人の検事をつけてフクジ口を張子の虎をこさえる工場へ送りました。

見物人はよろこんで、

「えらい裁判長だ。えらい裁判長だ。」とときの声をあげました。そこでネネムは又巡視またじゆんしをはじめました。

それから少し行きますと通りの右側に大きな泥どろでかためた家があつて世界警察長官邸かんていと看板が出て居りました。

「一寸はいつて見よう。」と云いながらネネムは玄関げんかんに立ちました。その家中が俄にわかにザワザワしてそれから警察長がさきに立

つて案内しました。一通り中の設備を見てからネネムは警察長と
向い合つて一つのテーブルに座りました。警察長は新聞のくらい
ある名刺めいしを出してひろげてネネムにうやうや恭々しくよこしました。見
ると、

ケンケンケンケンケンケン・クエク警察長

と書いてあります。ネネムは

「はてな、クエクと、どうも聞いたような名だ。一寸突然ですが
あなたはこの近在の農家のご出身ですか。」と云いました。

すると警察長はびっくりしたらしく、

「全くご明察の通りです。」と答えました。

「それではあなたは無断で家から逃げておいでになりましたね。

お母さんが大へん泣いておいでですよ。」とネネムが云いました。「いや、全く。実は昨晚も電報を打ちましたようなわけで、実はその、逃げたというわけでもありません。丁度一昨昨日の朝、一寸した用事で家から大学の小使室まで参りましたのですが、ついそのフウファイーボー博士の講義につり込まれました。昨日まで三日というもの、聴きいたり落第したり、考えたりいたしました。昨晚やつと及きゆうだい第だいいたしました。こちらに赴ふにん任にんいたしました。」

「ハツハツハ。そうですね。それは結構でした。もう電報をおかけでしたか。」

「はい。」

そこでネネムも全く感服してそれから警察長の家を出てそれか

ら又グルグルグル巡視をして、おひるごろ、ばけもの世界裁判長の官邸に帰りました。おひるのごちそうは藁わらのオムレツでした。

四、ペンネンネンネン・ネネムの安心

ばけもの世界裁判長、ペンネンネンネン・ネネムの評判は、今はもう非常なものになりました。この世界が、はじめ一疋びきのみじんこから、だんだん枝えだがついたり、足が出来たりして発達しはじめて以来、こんな名判官は実にはじめてだとみんなが申しました。

シヤアロンというばけもの高利貸でさえ、ああ実にペンネンネンネンネン・ネネムさまは名判官だ、ダニーさまの再来だ、いやダニーさまの発達だとほめた位です。

ばけもの世界長からは、毎日一つずつ位をつけて来ましたし、
勲章くんしょうを贈おくつてよこしましたので、今はその位を読みあげるだ

けに二時間かかり、勲章はネネムの室へやの壁かべ一杯になりました。それですから、何かの儀式ぎしきでネネムが式辞を讀んだりするときは、その位を讀むのがつらいので、それをあらかじめ三十に分けて置いて、三十人の部下に一ぺんにがやがやと読み上げて貰もらうようにしていましたが、それでさえやはり四分はかかりました。勲章だつてその通りです。どうしてネネムの胸につけ切れるもんではあ

りませんでしたから、ネネムの大礼服の上着は、胸の処ところから長さ
十米メートルばかりの切れがずうと続いて、それに勲章をぞろつとつけて、
その帯のようなものを、三十人の部下の人たちがぞろぞろ持つて
行くのでした。さてネネムは、この様な大へんな名誉めいよを得て、そ
のほかにも、みなさんももうご存知でしょうが、フウファイーボー博
士のほかに、誰たれも決して喰べてならない藁たれのオムレツまで、ネネ
ムは喰べることを許されていました。それですから、誰が考えて
もこんな幸福なことがない筈はずだったので、実はネネムは一向
面白くありませんでした。それというのは、あのネネムが八つの
飢饉ききんの年、お菓子かしの籠かごに入れられて、「おホイホイ、おホイ
ホイ。」と云いながらさらさらって行かれたネネムの妹のママミのこ

とが、一寸も頭から離れなかつた為ためです。

そこでネネムは、ある日、テーブルの上の鈴リンをチチンと鳴らし、部下の検事を一人、呼びました。

「一寸君にたずねたいことがあるのだが。」

「何でございますか。」

「膝ひざやかかとの骨の、まだ堅かたまらない小さな女の子をつかう商売は、一体どんな商売だろう。」

検事はしばらく考えてから答えました。

「それはばけもの奇術マジックでございましょう。ばけもの奇術師が、よく十二三位までの女の子を、変身術だと申して、ええこんどは犬の形、ええ今度は兎うさぎの形などと、ばけものをしんこ細工のよう

に延ばしたり円めたり、耳を附けたり又とつたり致すのをよく見受けます。」

「そうか。そして、そんなやつらは一体世界中に何人位あるのかな。」

「左様。一昨年の調べでは、奇術を職業にしますものは、五十九人となつて居りますが、只今は大分減つたかと存ぜられます。」

「そうか。どうもそんなしんこ細工のようなことをするというのは、この世界がまだなめくじでできていたころの遺風だ。一寸視察に出よう。事によると禁止をしなければなるまい。」

そこでネネムは、部下の検事を随したがえて、今日もまちへ出ました。そして検事の案内で、まっすぐに奇術大一座のある処に参りました。

た。奇術は今や丁度まつ最中です。

ネネムは、検事と一いっしょ緒に中へはいりました。楽隊が盛んにやさかつています。ギラギラする鋼のはがね小手だけつけた青と白との二人のはがねばけものが、電気決けつとう闘というものをやっているのです。剣がけんカチヤンカチヤンと云うたびに、青い火花が、まるで箒ほうきのように剣から出て、二人の顔を物もの凄く照らし、見物のものはみんなはらはらしていました。

「仲々勇ゆうそう壮だね。」とネネムは云いました。

そのうちにとうとう、一人はバアと音がして肩かたから胸から腰こしへかけてすつぽりと斬きられて、からだがまつ二つに分れ、バランチャンと床ゆかに倒たおれてしまいました。

斬った方は肩を怒らせて、三べん刀を高くふり廻し、
紫色の烈しい火花を揚げて、楽屋へは行って行きました。

すると倒れた方のまっ二つになったからだだがバタツと又一つになつて、見る見る傷口がすっかりくつつき、ゲラゲラゲラツと笑つて起きあがりました。そして頭をほんのすこし下げてお辞儀をして、

「まだ傷口がよくくつつきませんから、粗末なおじぎでごめんなさい。」と云いながら、又ゲラゲラゲラツと笑つて、これも楽屋へは行って行きました。

ボロン、ボロン、ボロロン、とどらが鳴りました。一つの白いきれを掛けた卓子と、椅子とが持ち出されました。眼のまわり

をまつ黒に塗ぬつた若いばけものが、わざと少し口を尖とがらして、テーブルに座すわりました。白い前掛をつけたばけものの給仕が、さしわたし四尺ばかりあるまつ白の皿さらを、恭々しく持つて来て卓子の上に置きました。

「フオーク！」と椅子にかけた若ばけものがテーブルを叩たたきつけてどなりました。

「へい。これはとんだ無調法を致しました。ただ今、すぐ持つて参ります。」と云いながら、その給仕は二尺ばかりあるホークを持つて参りました。

「ナイフ！」と又若ばけものはテーブルを叩いてどなりました。

「へい。これはとんだ無調法を致しました。ただ今、すぐ持つて

参ります。」と云いながらその給仕は、幕のうしろにはいつて行って、長さ二尺ばかりあるナイフを持って参りました。ところがそのナイフをテーブルの上に置きますと、すぐ刃がくにやんとまがってしまいました。

「だめだ、こんなもの。」とその椅子にかけたばけものは、ナイフを床に投げつけました。

ナイフはひらひらと床に落ちて、パツと赤い火に燃えあがつて消えてしまいました。

「へい。これは無調法致しました。ただ今のはナイフの広告でございしました。本物のいいのを持って参ります。」と云いながら給仕は引っ込んで行きまこした。

するとどうもネネムも検事もだれもかれもみんな愕おどろいてしまつたことは、いつの間にか、どうして出て来たのか、すてきに大きな青いばけものがテーブルに置かれた皿の上に、あぐらをかいて、椅子に座つた若ばけものを見おろしてすまし込んでいたのでした。青いばけものは、しずかにみんなの方を向きました。眼のまわりがまつ赤です。俄にわかに見物がどつと叫さけびました。

「テン・テンテンテン・テジマア！ うまいぞ。」

「ほう、素敵すてきだぞ。テジマア！」

テジマアと呼ばれた皿の上の大きなばけものは、顔をしずかに又廻して、椅子に座つたわかばけものの方を向きました。そして二人はまるで二匹の獅子ししのように、じつとにらみ合いました。見

物はもうみんな総立ちです。

「テジマア！ 負けるな。しっかりやれ。」

「しっかりやれ。テジマア！ 負けると食われるぞ。」こんなよ
うな大きわざのあとで、こんどはひっそりとなりました。そのう
ちに椅子に座った若ばけものは眼めが痛くなったらしく、とうとう
まばたきを一つやりました。皿の上のテジマアはじりじりと顔を
そつちへ寄せて行きます。若ばけものは又五つばかりつづけてま
ばたきをして、とうとうたまらなくなつたと見えて、両手で眼を
覆おほいました。皿の上のテジマアは落ちついてにゆうと顔を差し出
しました。若ばけものは、がたりと椅子から落ちました。テジマ
アはすつくりと皿の上に立ちあがって、それからひらりと皿をは

ね下りて、自分が椅子にどっかかり座りそれから床の上に倒れてい
る若ばけものを、雑作もなく皿の上につまみ上げました。

その時給仕が、たしかに金かねでできたらしいナイフを持って来て、
テーブルの上に置きました。テジマアは一寸ちよつとうなずいて、ポツ
ケツトから財布さいふを出し、半紙判の紙幣しへいを一枚引っぱり出して給仕
にそれを握にぎらせました。

「今度の旦那だんなは気前が実にいいなあ。」とつぶやきながら、ばけ
もの給仕は幕の中にはいつて行きました。そこでテジマアは、ナ
イフをとり上げて皿の上のばけものを、もにやもにやもにやつと
切つて、ホークに刺さして、むにやむにやむにやつと喰くつてしま
いました。

その時「バア」と声がして、その食われた筈の若ばけものが、床の下から躍りおどだしました。

「君よくたっしやで居て呉くれたね。」と云いながら、テジマアはそのわかばけものの手を取って、五六ぺんぶらぶら振りふりました。

「テジマア、テジマア！」

「うまいぞ、テジマア！」みんなはどつとはやしました。

舞台ぶたいの上の二人は、手を握ったまま、ふいっとおじぎをして、それから、

「バラコック、バララゲ、ボラン、ボラン、ボラン」と変な歌を高く歌いながら、幕の中に引っ込んで行きました。

ボロン、ボロン、ボロロンと、どらが又鳴りました。

舞台が月光のようにさつと青くなりました。それからだんだんのんびりしたいかにも春らしい桃色に変わりました。

まっ黒な着物を着たばけものが右左から十人ばかり大きなシャベルを持ったりきらきらするフォークをかついだりして出て来て

「おキレの角は^{つの}カンカン

ばけもの麦はベランベランベラン

ひばり、チツクチツクチー

フォークのひかりはサンサンサン。」

とばけもの世界の農業の歌を歌いながら畑を耕したり種子を蒔^まいたりするようなまねをはじめました。たちまち床からベランベランベランと大きな緑色のばけもの麦の木が生え出して見る間に立

派な茶色の穂^ほを出し小さな白い花をつけました。舞台は燃えるように赤く光りました。

「おキレの角はケンケンケン

ばけもの麦はザランザララ

とんびトーロロトーロロトー、

鎌^{かま}のひかりは シンシンシン。」

とみんなは足踏^{あしぶ}みをして歌いました。たちまち穂は立派な実になって頭をずうつと垂れました。黒いきものばけものどもはいつの間にか大きな鎌を持っていてそれをサクサク刈^かりはじめました。歌いながら踊^{おど}りながら刈りました。見る見る麦の束^{たば}は山のように舞台のまん中に積みあげられました。

「おキレの角はクンクンクン

ばけもの麦はザツク、ザツク、ザ、

からすカーララ、カーララ、カー、

唐箕とうみのうなりはフウララフウ。」

みんなはいつの間にか棒を持っていました。そして麦束はポン
ポン叩かれたと思うと、もうみんな粒つぶが落ちていました。麦稈むぎから

は青いほのおをあげてめらめらと燃え、あとには黄色な麦粒の小

山が残りしました。みんなはいつの間にかそれを摺すり臼うすにかけてい

ました。大きな唐箕がもう据すえつけられてフウフウフウと廻って

いました。

舞台が俄かにすきとおるような黄金色きんになりました。立派なひ

まわりの花がうしろの方にぞろりとならんで光っています。それから青や紺や黄やいろいろの色いろガラス硝子でこしらえた羽虫が波になつたり渦うずまき巻になつたりきらきらきら飛びめぐりました。

うしろのまつ黒なびろうどの幕が両方にさつと開いて顔の紺色な髪かみの火のようなきれいな女の子がまつ白なひらひらしたきものに宝石を一杯いっぱいにつけてまるで青や黄色のほのおのように踊つて飛び出しました。見物はもうみんなきちがい鯨くじらのような声で

「ケテン！ ケテン！」とどなりました。

女の子は笑つてうなずいてみんなに挨拶あいさつを返しながら舞台の前の方へ出て来ました。

黒いばけものはみんなで麦の粒をつかみました。

女の子も五六つぶそれをつまんでみんなの方に投げました。それが落ちて来たときはみんなまつ白な真珠しんじゆに変わっていました。「さあ、投げ。」と云いながら十人の黒いばけものがみな真似まねをして投げました。バラバラバラバラ真珠の雨は見物の頭に落ちて来ました。

女の子は笑って何かかすかに呪まじないのような歌をやりながらみんなを指図しています。

ペンネンネンネンネン・ネネムはその女の子の顔をじつと見ました。たしかにたしかにそれこそは妹のペンネンネンネンネン・マミミだったのです。ネネムはどうとう堪こたえ兼ねて高く叫びました。

「マミミ。マミミ。おれだよ。ネネムだよ。」

女の子はぎよつとしたようにネネムの方を見ました。それから何か叫んだようでしたが声がかすれてこっちまで届きませんでした。ネネムは又叫びました。

「おれだ。ネネムだ。」

マミミはまるで頭から足から火がついたようにはねあがって舞台から飛び降りようとしていたら、黒い助手のばけものどもが麦をなげるのをやめてばらばら走って来てしつかりと押えおさえました。

「マミミ。おれだ。ネネムだよ。」ネネムは舞台へはねあがりました。

幕のうしろからさっきのテジマアが黄色なゆるいガウンのよう

なものを着ていかにも落ち着いて出て参りました。

「さわがしいな。どうしたんだ。はてな。このお方はどうして舞台へおあがりになったのかな。」

ネネムはその顔をじっと見ました。それこそはあの飢饉ききんの年マミミをさらった黒い男でした。

「黙だまれ。忘れたか。おれはあの飢饉の年の森の中の子供だぞ。そしておれは今は世界裁判長だぞ。」

「それは大へんよろしい。それだからわしもあの時男の子は強いし大丈夫だいじょうぶだと云ったのだ。女の子の方は見る。この位立派になっている。もうスタアと云うものになつてゐる。お前も裁判長ならよく裁判して礼をよこせ。」

「しかしお前は何故^{なぜ}しんこ細工を興業するか。」

「いや。いやいやや。それは実に野蛮^{やばん}の遺風だ。この世界がまだなめくじでできていたころの遺風だ。」

「するとお前の処^{ところ}じゃしんこ細工の興業はやらんな。」

「勿^{もちろん}論^{ろん}さ。おれのとこのはみんな美学にかなっている。」

「いや。お前は偉^{えらい}い。それではマミミを返して呉れ。」

「いいとも。連れて行きなさい。けれども本人が望みならまた寄^よ越^こして呉れ。」

「うん。」

どうです。とうとうこんな変なことになりました。これというものもテジマアのばけもの格が高いからです。

とにかくそこでペンネンネンネンネン・ネネムはすっかり安心しました。

五、ペンネンネンネンネン・ネネムの出現

ペンネンネンネンネン・ネネムは独立もしましたし、立身もしましたし、じゅんし巡視もしましたし、すっかり安心もしましたから、だんだんからだもふと肥り声も大へん重くなりました。

大抵の裁判はネネムが出て行って、どしりと椅子いすにすわって物を云おうと一寸唇くちびるをうごかしますと、もうちやんときまつてしま
うのでした。

きて、ある日曜日、ペンネンネンネン・ネネムは三十人の部下をつれて、銀色の袍ほうをひるがえしながら丘へ行きました。

クラレという百合ゆりのような花が、まっ白にまぶしく光って、丘にもはざまにもいちめん咲いて居りました。ネネムは草に座って、つくづくとまっ青な空を見あげました。

部下の判事や検事たちが、その両側からぐるつと環わになつてならびました。

「どうだい。いい天気じゃないか。」

ここへ来て見るとわれわれの世界もずいぶんしずかだね。「ネネムが云いました。」

みんなの影かげぼうし法師が草にまっ黒に落ちました。

「ちかごろは噴火ふんかもありませんし、地震じしんもありませんし、どうも空は青い一方ですな。」

判事たちの中で一番位の高いまつ赤な、ばけものが云いました。
「そうだね全くそうだ。しかし昨日サンムトリが大分鳴ったそうじゃないか。」

「ええ新報に出て居りました。サンムトリというのはあれですか。」

二番目にえらい判事が向うの青く光る三角な山を指しました。
「うん。そうさ。僕ぼくの計算によると、どうしても近いうちに噴きふ出さないといかんのだがな。何せ、サンムトリの底の瓦斯ガスの圧力が九十億気圧以上になってるんだ。それにサンムトリの一番弱い

所は、八十億気圧にしか耐えない筈なんだ。それに噴火をやらんというのはおかしいじゃないか。僕の計算にまちがいがあるとはどうもそう思えんね。」

「ええ。」

上席判事やみんなが一緒にうなずきました。その時向うのサ
 ンムトリの青い光がぐらぐらつとゆれました。それからよこの方
 へ少しまがったように見えました。忽ち山が水瓜を割ったよう
 にまっ二つに開き、黄色や褐色の煙がぷうつと高く高く噴き
 あげました。

それから黄金色の熔岩がきらきらきらと流れ出して見る間に
 ずっと扇形にひろがりました。見ていたものは

「ああやったやった。」

とそつちに手を延して高く叫びました。

「やったやった。とうとう噴いた。」

とペンネンネンネンネン・ネネムはけだかい紺こんじょう青色にかがやいてしずかに云いました。

その時はじめて地面がぐらぐらぐら、波のようにゆれ

「ガーン、ドロドロドロドロ、ノンノンノンノン。」と耳もやぶれるばかりの音がやって来ました。それから風がどうつと吹ふいて行って忽ちサンムトリの煙は向うの方へ曲り空はますます青くクラレの花はさんさんとかがやきました。上席判事が云いました。

「裁判長はどうも実に偉い。今や地殻^{ちかく}までが裁判長の神聖な裁断に服するのだ。」

二番目の判事が云いました。

「実にペンネンネンネンネン・ネネム裁判長は超^{ちよう}怪^{かい}である。

私はニイチヤの哲学^{おそ}が恐らくは裁判長から暗示を受けているものであることを主張する。」

みんなが一度に叫^{さけ}びました。

「ブラボオ、ネネム裁判長。ブラボオ、ネネム裁判長。」

ネネムはしずかに笑って居りました。その得意な顔はまるで青空よりもかがやき、上等の瑠璃^{るり}よりも冴^さえました。そればかりでなく、みんなのブラボオの声は高く天地にひびき、地殻がノンノ

ンノンノンとゆれ、やがてその波がサンムトリに届いたころ、サンムトリがその影えいきよう響を受けて火柱高く第二の爆発ばくはつをやりました。

「ガーン、ドロドロドロドロ、ノンノンノンノン。」

それから風がどうつと吹いて行って、火山弾や熱い灰やすべてあぶないものがこの立派なネネムの方に落ちて来ないように山の向うの方へ追ひ払はらったのでした。ネネムはこの時は正によろこびの絶頂でした。とうとう立ちあがって高く歌いました。

「おれは昔は森の中の昆布こんぶ取り、

その昆布網あみが空にひろがったとき

風の中のふかやさめがつきあたり

おれの手がぐらぐらとゆれたのだ。

おれはフウファイブオ博士の弟子^{でし}

博士はおれの出した筆記帳を

あくびと一しよにスポリと呑み^のこんだ。

それから博士は窓から飛んで出た。

おれはむかし奇術師のテジマアに

おれの妹をさらわれていた。

その奇術師のテジマアのところ

おれの妹はスタアになっていた。

いまではおれは勲章くんしょうが百ダアス

藁わらのオムレツももうたべあきた。

おれの裁断には地殻も服する

サンムトリさえ西瓜すいかのように割れたのだ。」

さあ三十人の部下の判事と検事はすっかりつり込まれて一緒に立ち上がって、

「ブラボオ、ペンネンネンネンネン・ネネム

ブラボオ、ペンペンペンペンペン・ペネム。」

と叫びながら踊りはじめました。

「ファイガロ、ファイガロト、ファイガロツト。」

クラレの花がきらきら光り、クラレの茎くきがパチンパチンと折れ、みんなの影法師はまるで戦のように乱れて動きました。向うではサンムトリが第三回の爆発をやっています。

「ガアン、ドロドロドロドロ、ノンノンノンノン。」

黄金きんの熔岩ようがん、まっ黒なけむり。

「ファイガロ、ファイガロト、ファイガロツト。」

ペンネンネンネンネン・ネネム裁判長

その威いオキレの金角きんかくとならび

まひるクラレの花の丘に立ち

遠い青びかりのサンムトリに命令する。

青びかりの三角のサンムトリが

たちまち火柱を空にささげる。

風が来てクラレの花がひかり

ペンネンネンネンネン・ネネムは高く笑う。

ブラボオ。ペンネンネンネンネン・ネネム

ブラボオ、ペンペンペンペンペン・ペネム。」

その時サンムトリが丁度第四回の爆発をやりました。

「ガアン、ドロドロドロドロ、ノンノンノンノンノン。」

ネネムをはじめばけものの検事も判事もみんな夢中むちゆうになつて

歌つてはねて踊おどりました。

「フイーガロ、フイガロト、フイガロツト。

風が青ぞらを吼^ほえて行けば

そのなごりが地面に下つて

クラレの花がさんさんと光り

おれたちの袍^{ほう}はひるがえる。

さつきかけて行つた風が

いまサンムトリに届いたのだ。

そのまっ黒なけむりの柱が

向うの方に倒^{たお}れて行く。

フイーガロ、フイガロト、フイガロツト。

ブラボオ、ペンネンネンネン・ネネム

ブラボオ、ペンペンペンペンペン・ペネム。

おれたちの叫び声は地面をゆすり

その波は一分に二十五ノツト

サンムトリの熱い岩がんしよう漿にとどいて

とうとうも一度爆発をやった。

フィーガロ、フィガロト、フィガロツト。

フィーガロ、フィガロト、フィガロツト。」

ネネムは踊ってあばれてどなって笑ってはせまわりました。

その時どうしたはずみか、足が少し悪い方へそれました。

悪い方というのはクラレの花の咲いたばかりの世界の野原の
一ち

よつと
寸うしろのあたり、うしろと云うよりは少し前の方でそれは人間の世界なのでした。

「あつ。裁判長がしくじった。」
と誰か^{たれ}がけたたましく叫んでいるようでしたが、ネネムはもう頭がカアンと鳴ったまま真っ黒なガツガツした岩の上に立っていました。

すぐ前には本当に夢^{ゆめ}のような細い細い路^{みち}が灰色の苔^{こけ}の中をふらふらと通っているのです。そらが真っ白でずうっと高く、うしろの方はけわしい坂で、それも間もなくいちめんの真っ白な雲の中に消えています。

どこにたった今歌っていたあのばけもの世界のクラレの花の咲

いた野原があつたでしよう。実にそれはネパールの国からチベツトへ入る峠とうげの頂だつたのです。

ネネムのすぐ前に三本の竿さおが立つてその上に細長い紐ひものようなぼろ切れが沢たくさん山結び付けられ、風にパタパタパタパタ鳴つていました。

ネネムはそれを見て思わずぞつとしました。

それこそはたびたび聞いた西蔵チベットの魔除まよけの幡はたなのでした。ネネムは逃にげ出しました。まっ黒なけわしい岩の峯みねの上をどこまでもどこまでも逃げました。

ところがすぐ向うから二人の巡じゅんれい礼れいが細かい声で歌を歌いながらやって参ります。ネネムはあわててバタバタバタバタもがきま

した。何とかして早くばけもの世界に戻ろうとしたのです。

巡礼たちは早くもネネムを見つけました。そしてびっくりして地にひれふして何だかわけのわからない呪文じゅもんをとなえ出ししました。

ネネムはまるでからだがしびれて来ました。そしてだんだん気が遠くなつてとうとうガーンと気絶してしまいました。

ガーン。

それからしばらくたつてネネムはすぐ耳のところまで

「裁判長。裁判長。しっかりなさい、裁判長。」という声を聞きました。おどろいて眼を明いて見るとそこはさっきのクラレの野原でした。

三十人の部下たちがまわりに集まって実に心配そうにしています。

「ああ僕はどうしたんだろう。」

「只ただいま今空から落ちておいででございました。気分はいかがですか。」

上席判事が尋ねました。

「ああ、ありがとう。もうどうもない。しかしとうとう僕は出現してしまった。」

僕は今日は自分を裁判しなければならぬ。

ああ僕は辞職しよう。それからあしたから百日、ばけもの大学校の掃除そうじをしよう。ああ、何もかにもおしまいだ。」

ネネムは思わず泣きました。三十人の部下も一緒に大声で泣きました。その声はノンノンノンノンと地面に波をたて、それが向うのサンムトリに届いたころサンムトリが赤い火柱をあげて第五回の爆発をやりました。

「ガアン、ドロドロドロドロ。」

風がどつと吹いて折れたクラレの花がプルプルとゆれました。

〔以下原稿なし〕

青空文庫情報

底本：「ポラーノの広場」新潮文庫、新潮社

1995（平成7）年2月1日発行

1997（平成9）年5月25日3刷

底本の親本：「新修宮沢賢治全集 第九卷 童話」筑摩書房

1979（昭和54）年7月15日初版第1刷発行

※□内は、底本の注記です。

入力：土屋隆

校正：鈴木厚司

2010年2月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>